セッション	D. 言語行動・日本語教育　　（2014.3.22　於 北京日本学研究中心）
タイトル	発話・行為・環境―会話活動の中で発話を捉え直す―
著者名（所属）	名塩　征史（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院）
連絡先 E ﾒｰﾙ	nashio@imc.hokudai.ac.jp

論文内容

本研究では、多人数会話活動の中で起こる「語用実践行為」（Mey, 2001）を対象に経験的・質的な事例分析を行った。Mey（2001）によれば、語用実践行為は「コンテクスト化された適応行動」であり、発話もまた実際の状況によって制約された行為の一例に過ぎないとした。その本旨を明瞭にすべく、本発表では「今、ここ」に既にある環境との関連から発話を捉え直し、その制約された実践的機能について一考を加える。

本研究では、予め特定の課題や話題が与えられることなく開始された日本人３名による会話活動をビデオカメラで収録した。調査者（本稿の筆者）から参与者に与えられた指示は「一時間を楽しく過ごす」といったものだけで、その他参与者の言動に対する特別な制限は加えられていない。また収録開始とともに調査者は退室するため、収録中に調査者から参与者に対して指示が与えられることもない。したがって、当該の会話活動は、半ば実験的に設定された環境下にありながら、各参与者が主体性を発揮し、多様な可能性を切り盛りしながら、互いに協調と競合を繰り返す様相となっている。本発表では、同データを用いた名塩（2013a）の事例分析から、コップにお湯を注いでもらう際に他者に対して一言「お湯」とだけ発話される事例を取り上げ、発話を活動に埋め込まれた出来事の一つとして捉え直す。同時に、Silverstein（1993）における「語用（pragmatics)」の定義に依拠し、言語人類学的なアプローチによって、当該事例における〔発話−コンテクスト〕の相互特定的な関係について考察する。

分析と考察の結果、次の３点が確認・示唆される。1)発話は、各参与者にその場の環境から特定の活動システムを抽出させるきっかけとして捉え直すことができる（名塩, 2013a）。その場合、2)発話に対する微視的な認知は、各参与者が周囲の現状を主体的・主観的に再認識する大局的な認知と同時に行われる。また、3)当該発話は、参与者の内外の要素（[経験／知識]と[実在するもの]）によって構成された「複合コンテクスト」（名塩, 2013b）に基づき意味づけられ、その適切性が確認される。

本発表では上記の知見に基づき、結論に代えて、次のような主張・提唱を行う。活動の実践は「今、ここ」に既にある事物を当該の活動に利用可能な要素として適切に関連づける体系化を必要とするが、分析の対象となった一語発話はそうしたシステムの一要素に言及し、それを直示／喚起しているに過ぎない。しかし、他者の参与を必要とする活動においては、その実践に際して他者にも同様の活動システムを抽出させる必要があり、発話による特定の要素の言表は、その要素を含み込む活動システムが参与者間で同期的に抽出・利用されるためには不可欠なものであると言えるだろう。また、これらの知見は、コンテクストに関するより詳細な議論の必要性を示唆している。Mey（2001）で指摘されるように、旧套の語用論では、言語（使用）からコンテクストを想定するという「内から外へ」の思考に傾倒する研究が多く見受けられた。しかし、言語行為は常に特定の環境下で実践され、言語使用者は常に特定の社会／文化によって力づけられ限界づけられた存在であることを忘れてはならない。本発表では最後に、語用論における今後の課題として、定義が曖昧なまま乱用されてきた印象がある「コンテクスト」の実態／体系についてより精緻な議論の展開、ならびに既存のコンテクストに基づき言語行為が選択されるという「外から内へ」の思考の重視を提唱する。

参考文献

Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction.* Malden: Blackwell.（小山亘訳（2005).『批判的社会語用論入門―社会と文化の言語』 三元社）

名塩征史（2013a)「ある行為の可能性を備える環境の捉え直しとそのきっかけとなりうる一語発話―〔知覚−行為〕との関連でみる発話の効果―」『メディア・コミュニケーション研究』第 65 号: pp. 13-35.

名塩征史（2013b)「複合コンテクストに基づき意味づけられる出来事としての発話」山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎（編)『認知言語学論考 No. 11』ひつじ書房: pp. 53-97.

Silverstein, M. (1993) Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In John A. Lucy (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Pragmatics.* Cambridge University Press: pp. 33-58.